

〈 連載(259) 〉

広島・呉の大和ミュージアムでのクルーズ展



大阪府立大学大学院・海洋システム工学分野・教授
池田 良穂

呉にある海事博物館「大和ミュージアム」でのクルーズに関する企画展の監修依頼と、同展の期間中の日曜日に行う一般客向けの講演・トーク企画への出演依頼があった。同博物館は、呉市営だが、館長には東京在住の専門家を招き、企画運営は博物館等の仕事を広く請け負う大阪の企画会社を使っている。公営の博物館では、設置自治体のOBが天下りしていて、その専門能力に疑問がある場合も散見されるが、ここの博物館は、そのテーマを熟知したプロ集団による企画運営が光っている。

精巧に作成された戦艦「大和」の1/10模型が中心となり、琵琶湖に沈んでいたゼロ戦や特殊潜航艇「海龍」などの実物が展示されており、また、戦前の海軍の造船所であった呉工廠の歴史や、建造技術、そして大和の建造に関する展示もたいへん見ごたえがある。

日本国内の多くの海事博物館は経営がたいへん厳しいと言われているが、大和ミュージアムは年間来場者が80万人を超え、黒字経営を続けているという。東京の「船の科学館」、大阪の「なにわの海の時空間」な

どの海事博物館が閉館に追い込まれていることは周知のとおりであるが、やり方によっては多くの観光客を集め、経済波及効果も大きくできるという良い成功事例と言える。海洋基本法もできた今、海事博物館は、一般の人々に海事について広報をしていくための地域の拠点として重要な役割を担うべき時となっている。

さて、冒頭の依頼を受けて講演会の前日に、大阪から呉へと移動した。広島からはJR呉線を使えば最も速いが、せっかく海事都市「呉」に行くのに、それでは芸がないように思った。できれば海から呉に入りたい。そこで、広島駅で新幹線を降りてから、路面電車で宇品の港へと向かった。

この宇品港からは、近隣の島に行くフェリーや高速船がでている他、四国の松山行きのフェリーと高速船がでており、いずれも呉港に寄港する。新しくなった宇品の旅客船ターミナルで時刻表を見ると、30分後に松山行きのフェリーが出港するので、それに乗ることにした。900円でチケットを購入してから、栈橋にでて、港に出入する

船にカメラを向けた。



広島から呉まで乗船した石崎汽船のフェリー「翔洋丸」

やがて、出航時間間近になって、松山行きの石崎汽船の「翔洋丸」が入港して来た。船首のブリッジ位置が非常に高い位置にあるので、トップヘビーのとてもユニークな外観だ。白い船体が棧橋の前で反転して、船尾から着岸した。車と乗客が降りると、すぐに乗船開始となり、港での停泊時間はわずか10分ほどだ。

船内は車両甲板の上に、2層の旅客甲板があり、その上にブリッジがある。2層の旅客スペースの前方には大きな窓があって眺めのよいラウンジになっているのだが、その窓が真っ白に潮で汚れていてなんともいだけない。仕方がなしに、呉に着くまでの30分余りをオープンデッキで過ごすことにした。

宇品を出港すると、幾隻ものフェリーや高速旅客船と出会う。また、大型の自動車運搬船PCCが3隻も停泊している。マツダの製造した車の輸出のためであろう。

やがて、左手前方に呉の工場地帯が見えてきた。沖には大型のバルクキャリアが積荷を満載した状態で停泊している。フェリ

ーは小さな島をかわすと、左転していよいよ呉港へと入っていく。右手には、日新製鋼の工場、海上自衛隊の基地に並ぶ潜水艦や護衛艦、IHIマリンユナイテッドの呉工場が次々と現れる。IHIの造船所では、3隻の大型コンテナ船とバラ積み船が並んで艤装中であつた。ここで、かつて大和も建造されたのだ。

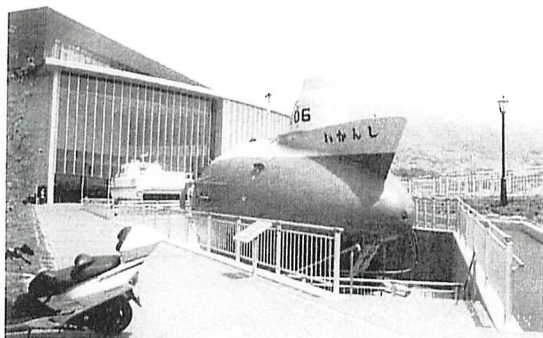
正面に呉の町並みが広がり、その真ん中に大和ミュージアムと陸上に上げられた海上自衛隊の潜水艦「鉄のくじら艦」が迫ってくる。なかなかの迫力で、海から呉に入ってきたと思った瞬間であつた。まさに海事都市呉の玄関は港なのだ。



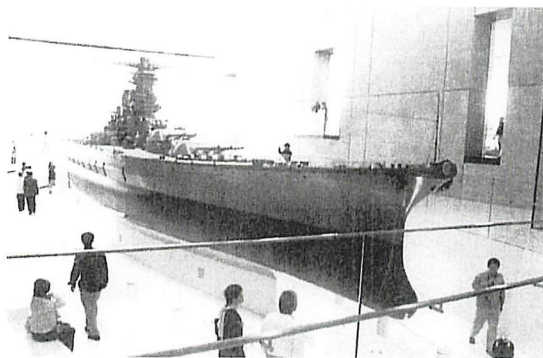
呉のIHIマリンユナイテッドの造船所で艤装中の大型船



呉のフェリーターミナルと大和ミュージアム(左手)



大和ミュージアムの屋外展示とガラス張りの本館



精巧な大和の1/10模型

翌朝、大和ミュージアムに行くと、すでに館内は見学者でごった返していた。土日は、いつもこのような状況らしい。観光バスでの団体客だけでなく、自家用車でやってくる人も多いという。

戸高館長の案内で、まず「大和」の模型をじっくりと見学した。これまで2回ほど同館を訪れて同模型を見てはいるのだが、同模型の製作過程とその間の苦労話を館長から聞きながら、じっくりと見てみると、この大和の模型が確かに素晴らしい1つの芸術品だということが分かってきた。図面や写真を駆使して、あらゆる所をできるだけ正確に再現したという。例えば、甲板も実物と同じく1枚1枚木材を張り合わせていったという。手すりも実物と同じに倒れ、各砲台も回転もできるという。展示されてからは、決して人目につかないところも手抜きをせずに丁寧に作ったと、熱のこもった口調で話す館長をみて、この館長だからこそ本物志向の展示品ができ、それが観客にも伝わって、開館8年になってもますます来館者が増えるという異例の人気博物館になっているのだろうと感じた。

また、子供たちに船の技術を学んでもらうスペースも充実している。

さて、クルーズの特別展は、1階のスペースにあった。呉で航空母艦に改造された客船の紹介にも大きなスペースをとっているのは、地元密着型の博物館として使命とも言える。戦前の客船の多くが戦争に巻き込まれて沈んでいった歴史を知ること意義深い。

現代クルーズのコーナーでは、22万総トンの世界最大の「オアシス・オブ・ザ・シーズ」、キュナードの「クイーンメリー2」や日本の誇る「飛鳥Ⅱ」などのハイグレート客船、来年は日本の各地の港に姿を現すプリンセスクルーズの「サン・プリンセス」などが、パネル展示されており、いくつかの模型船も並んでいる。

また本展示スペースの一画には、クルーズに関する書籍なども並べられており、ゆっくり座ってこれらの書籍を手にとって読むこともできるようになっている。筆者の著書「クルーズビジネス論」も置いていただいております。

午後から、同館の4階のサロンで講演会が開催された。ここからは、造船所で艤装中の大型船をまさに目の前に見ることができ、出入港するフェリーや高速旅客船も眼

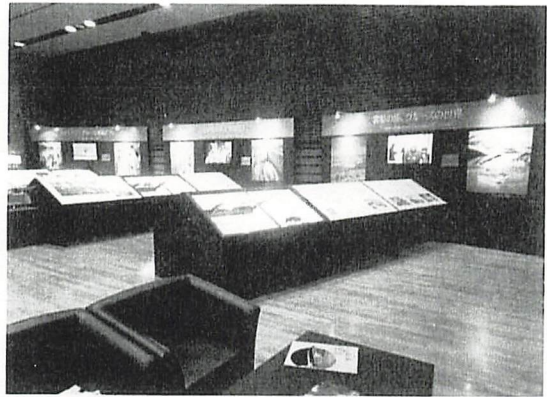
下に見ることができる。すなわち、生きて
いる港を実際に目にすることのできる絶好
のウォッチングポイントになっている。

ここでの講演会は、筆者の15分間の基調
報告と、館長、木島カーニバル・ジャパン
社長とのトークセッション。最近の、格安
で短期で、だれでも気軽に乗られる現代ク
ルーズの楽しみ方について紹介をした。

では、「大和ミュージアム」という、戦艦
「和」を中心とした軍艦主体の海事博物館
が、なぜ、クルーズの特別展を開催するこ
とになったのか。疑問に思う人も多いと思
う。館長以下、船の技術が学べる博物館を
目指しており、決して軍艦・軍事だけがタ
ーゲットとは思っていないようだ。老若男
女、みんなに船の技術の面白さを伝えたい
という思いから、今回のクルーズ客船をテ
ーマにした特別展「客船の旅—近代日本の

客船と呉・現代クルーズの世界」という企
画になったようだ。同展示は、来年の1月
21日まで開催されているので、この機会に
ぜひ訪れて欲しい。

最後に、今後の「大和ミュージアム」のさ
らなる発展を祈るとともに、全国の海事博
物館の活性化に、同博物館の成功事例が役
にたてばと思う。



特別展「客船の旅」

『海洋構造力学の基礎』

吉田宏一郎 著

現代の社会インフラとして重要な役割を担っ
ている船舶、港湾構造物は、海上輸送、海上交通、
水産、災害防止などに利用されている。これら
に加え、時事ニュースでも話題になっている海
底の石油・天然ガスの開発が活発になり、海洋
プラットフォームとしてさまざまな海洋構造物
が考案され使われるようになってきた。さらに、
今後、海洋の調査・観測、各種利用・開発、管理・
保全の重要性が高まりつつあり、それらのため
の新形式の海洋プラットフォームが出現してく
ることだろう。

本書は、海洋プラットフォームの核となる海
洋構造物の計画、設計、建造、建設、保守管理
に関わる技術として重要な構造力学、すなわち
海洋構造力学の基礎を解説している図書だ。

大学工学系の学部上級生、大学院工学系の修

士課程院生および海洋構造物の計画、設計、建
造、建設、保守管理に関わる若手技術者やこれ
らの分野に携わる技術者一般の知識の整理にも
役立つ図書である。

海洋構造力学の基礎

吉田宏一郎 著



A5判・352頁・定価6,930円(税込)

発行所：株式会社 成山堂書店

〒160-0012 東京都新宿区南元町4-51成山堂ビル

電話：03-3357-5861 FAX：03-3357-5867

e-mail：order@seizando.co.jp